

1. 調査目的等

小・義務教育学校1年生から6年生の児童の学力を把握・分析し、学校における教育指導の成果と課題の検証やその改善に役立てる。

2. 学校ごとの指標

・標準学力検査 学校平均 52

3. 指標にむけての取組

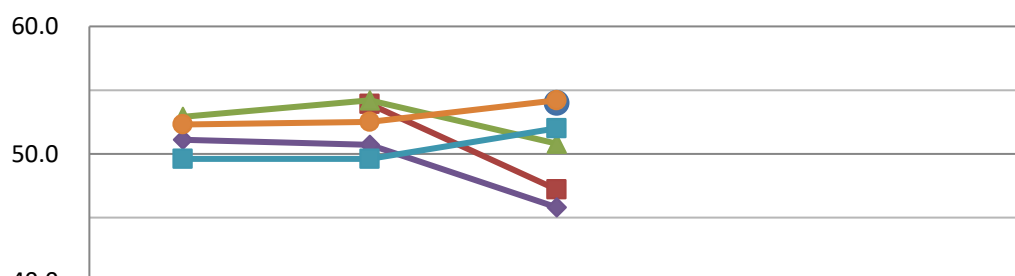
- 算数では、誰一人取り残さないようにするため、単元構成や指導方法を工夫した習熟度別指導を行い、算数科の基礎・基本の定着を図った。(定着度を図るためのクリア問題を位置付け)
- 国語では、全国学力・学習状況調査や県学力調査から見える課題克服のため、条件付記述式問題に特化した取組を短期的・集中的に専科教員を中心に行った。
- 単元テストの通過率の低い児童の学力向上を目的に、隙間時間や放課後の時間などを利用した補充学習を行った。

4. 調査結果

※学校平均(国語・算数)2年間の推移 (標準スコア:全国値の正答率を50とした時の換算値)

年度	3年度	4年度	5年度		
本校(A)	49.4	51.5	50.6		
嘉麻市(B)	47.0	47.2	48.5		
(A) - (B)	2.4	4.3	2.1	0.0	0.0
全国値との差 (A) - (50)	-0.6	1.5	0.6	-50.0	-50.0

各学年の標準スコアの推移



	3年度実施	4年度実施	5年度実施		
5年度1年生			54.0		
5年度2年生		53.9	47.2		
5年度3年生	52.9	54.2	50.8		
5年度4年生	51.1	50.7	45.8		
5年度5年生	49.6	49.6	52.0		
5年度6年生	52.3	52.5	54.2		

## 5. 各学校における分析

**成果** 各カテゴリー 標準スコア50 達成率(全国平均)

<国語> 活用問題、記述形式 主体的に取り組む態度 83% 「書くこと」の領域 100%

<算数> 活用問題、主体的に取り組む態度 83%

以上のことから、2つのことが有効だったと考える。

○ 重点単元を絞り込み、短いスパンで見取りながら支援したり、1単位時間の思考活動や振り返りに、書く活動を設定したりし、日々継続したこと。

○ 国語の読解力や条件付記述問題に特化した取組を、短期的・集中的に実施したこと。

### 課題

標準スコアを学年ごとに比較すると、<国語>で差が6.2P、<算数>で差が13.5Pがあった。

以上のことから、2つのことが必要と考える。

○ 学年格差があり、正答率に差が大きいことや基礎・基本の定着ができていない学年があることから、引き続き組織的な取組の共通理解・共通実施の徹底が必要。

○ 単元テストでは正答率が上がり、学年のまとめの学力調査で落ちていることから、補充学習や

## 6. 各学校における今後の取組

○基礎的・基本的な学力の定着を図るため、算数科で「誰一人取り残さない授業の取組(習熟度別学習、単元途中の形成的評価と総括的評価)」を設定し、共通理解・共通実施を徹底する。

○学力の基盤づくりのため、CD層を対象としたマンツーマン学習支援や週末課題の自己選択による学習の個性化(ICT活用)を継続的に実施する。

○学びに向かう意欲を高めるため、前時の振り返り(学習ログ)等から自分の課題を明確にし、自分の解決方法で、学びを進めていくことができるよう、授業改善を行う。

## 7. 嘉麻市教育委員会としての今後の取組

◎今後の取組を具体化し推進できるように、特に次の3点について指導助言及び支援を行うとともに、周知徹底できるように継続的に指導する。

◆嘉麻市学力向上全体構想に設定した学習評価からの授業づくり(指導と評価の一体化)や思考を伴う「書く活動」を核とした授業づくりの推進する。そのために、指導主事を派遣して校内研修で授業観察指導を実施したり、「書く活動ポイント9」や「授業チェックリスト」を活用できるように指導助言や支援を行ったりする。

◆嘉麻市学力向上全体構想に設定した「家庭学習の取組」を推進する。そのために、AIドリルを活用した個に応じた家庭学習課題の推進を図る。

また、個に応じた学習課題の提示を進める各学校の取組を交流する場を設定する。

◆学力向上検証委員会を開催し、単元テスト評価後の個に応じた習熟度別指導を取り入れた指導方法の工夫を推進する。そのために、習熟度別指導の単元づくりや個に応じた補充プリントの活用の仕方、ICTの利活用について指導する。